

インド佛教への道しるべ (三)

— 中 観 佛 教 —

安 井 広 濟

—

「中観佛教」は、「原始佛教」や「アビダルマ佛教」とおなじく、佛教の基礎学である。佛教思想の根本となり基礎となるものは、「無常」「無我」「空」の思想にあるが、中観佛教は、この佛教思想の正しい成立を理論的に究明することを、特に中心課題とする佛教であるからである。中観佛教の祖である龍樹(Nāgārjuna)が「第二の釈尊」といわれ、「八宗の祖」と尊称されるところから見てもわかるように、中観佛教は、大乘佛教の発展にきわめて大きな影響を与えている。大乘佛教のその後の発展は、すべてなんらかの意味で、その教義を龍樹の中観佛教に負うているのであって、中観佛教は、佛教思想の根本になり基礎になるものとして、全佛教的に、ま

ことに大きな比重を占めている。この意味で、中観佛教は、佛教に哲学的な基礎と宗教的な深さとを与えるものである、といつてよい。だから、広く佛教を学ぼうとする者は、「原始佛教」によって釈尊の教説に接し、「アビダルマ佛教」によって広範な佛教研究の領域をうかがうのみならず、すすんで、この「中観佛教」によって、佛教思想の根本に深く思いをこらすことが必要である。私は、これが佛教を学ぶ者の基礎的な態度であろう、と思っている。

「中観」ということは、madhyama (中) という梵語の漢訳語である。したがって、文字どおりにいえば、「中観佛教」は「中佛教」の意味である。「観」という字が「中」に附加されるのは、「中」が「中道」を意味するからである、と考えられる。ところが、中観佛教を

直接専攻する者でも、初心者は空の思想に目を奪われて、口に中観、中観といいながら、案外、漠然と中観を考えているようである。初心者の中には、中観佛教を否定主義のように考える者すらもある。しかし、「中観」が「中道」の意味であり、中観佛教のめざすところが中道にあることを見忘れてはいけぬ。有無の二辺をはなれた絶対肯定的な真実を語ろうとするのが、中観佛教である。

龍樹に始まる中観佛教は、中観学派(Madhyanika 中学派、中道学派)といわれ、中道を学派名とし、佛陀以来の中道の解明に重きをおくのであって、このことは、特に、われわれの明らかに認識しておかねばならぬ所である。龍樹によると、「空性と縁起と中道は同一義」といわれており、中観佛教は、「縁起」が意味する「空」の論理によって、「中道」をあやまりなく示そうとするのであって、中道の思想をのぞいたならば、中観佛教は全く無意味である。中観佛教によるかぎり、佛教思想の根本は「空」であるが、これが、実に「中道」であり「中観」なのである。中観を学ぼうとする人は、まずもって、このことを念頭においていただきたい。

しかし、中観佛教を学ぼうとしても、どこから、どう始めてよいか、とまどうのが実情である。「縁起」といい、「空」といい、「中道」といっても、なかなか分りにくい概念であって、学者によって意見もちがっている。そこで、私は、本稿において、まず、中観佛教にかんする諸文献と、これらにたいする文献学的な研究を紹介し、とりあえず、「中観佛教」への道しるべとしたい。

もちろん、文献学的な知識のみでは不充分であり、思想内容を了解するのが大切である。佛教の中でも、ことに中観佛教は思想的、哲学的な性格をもっているので、われわれは種々の研究によって、その思想の内容をいろいろと思索してみなければならぬ。だから、私は、続く第三節において研究書も指示しておいた。しかし、近代における中観佛教の研究は、主として梵語やチベット語による文献学的な研究によって、半世紀ほどの間にめざましい進歩をとげているのであって、われわれは、まず、こういう文献学的な研究の領域を始めにいちおうなりとも知っておく必要がある。すくなくとも、中観佛教を専攻しようとする程の者ならば、とりあえず、これらのあ

らましくらいは、知っておかねばならぬ。

中観佛教にかんする文献として、まず第一にあげるべきものは、もちろん龍樹の著作である。彼の著作と称せられるものは数多く、真偽未決の作品もあるが、注目すべきものは、大体、次の如きものである。

(1) 「中論」(Madhyamaka-kārikā)

「根本中論」といわれ、「根本」という形容詞によって格段の尊敬がはらわれている。本書は、龍樹の初期の作品と考えられるけれど、龍樹は彼の中観哲学の理論となるものを、本書において各種の方面から全力をあげて述べようとするようである。全体が二十七章に分かれ、四四七の偈頌より成るが、梵・藏・漢の三本を対照すると、偈頌の数について多少の異同があり、偈頌の読み方に、ことに多くの相異がある。これらの原典的な整理は、まだ完全におこなわれていないが、宇井伯寿「国訳中論」(国訳大蔵経 論部五)、羽溪了諦「中論」(国訳一切経 中観部一)、宇井伯寿「中論」(東洋の論理、所収) 平川彰「中論」(世界古典文学全集「佛典Ⅱ」、所収)があり、入門者に便利である。また、三枝充憲・久我順「中論梵漢藏対照語彙」(大乘佛教の成

立史的研究附録)があり、研究者に便利である。本書には、次のような七種類の註釈書が存する。

(a) 無畏註 (Aśobhaya)

龍樹の自註といわれているが、池田澄達氏やオバミラー教授はこれを疑っている。チベット訳にのみ存し、これにたいして、マックス・ワレーザー教授の独訳があり、また、池田澄達氏の邦訳、寺本婉雅氏の邦訳がある。

(b) 青目 (Pingala) の註

漢訳のみに存し、古来、中国・日本の中観佛教の典範として学習された註釈である。マックス・ワレーザー教授の独訳がある。

(c) 佛護 (Buddhapālita) の註

チベット訳にのみ存する。第一章の邦訳(大竹照真、密教研究四二、四五、五九)があるが、全訳は発表されていない。本書の註釈のスタイルは、プラーサンギカの学風として、月称の註釈へ伝承される。

(d) 清弁 (Bhāvavivaka) の註

漢訳とチベット訳に存する。漢訳は「般若灯論釈」という。チベット訳にたいする部分的な邦訳(梶山雄一、第十八章の訳。「世界の名著、大乘佛典」所収)、

(安井広済、第二十五章後半の訳。「中観思想の研究」所収)があるが、全訳はない。本書の註釈のスタイルはスヴァータントリカの学風であり、ブラーサンギカと対立する。なお、本書には、アヴァローキタヴラタ (Avalokitavrata) の詳細な註釈がチベット訳に存する。

(e) 安恵 (Sthiramati) の註

漢訳 (大乘中観釈論) のみ存する。大正藏経は第九卷まで、後の九卷は卍字藏経におさめられている。本書はあまり研究されていない。

(f) 月称 (Candrakirti) の註

唯一の梵語原典で、チベット訳も存する。漢訳は存しない。梵語原典は「浄名句論」(Prasannapada) といわれ、ド・ラ・ヴァレー・プーサン教授によって校訂出版されている。本書は、中観思想の研究の発達をうながした貴重な文献で、欧訳として、スチエールバッキー(第一、二十五章の英訳)、シャイエル(第五、第十二—第十六の独訳、および、第十章の独訳)、ラモート(第十七章の佛訳)、ド・ヨング(第十八—第二十二章の佛訳)、ジャックメイ(第二—第四、第六—第九、第十一、第二十三、第二十四、第二十六、第二十七

章の佛訳)などの部分訳がある。邦訳としては、荻原雲来博士(第十二章—第十七章、「荻原雲来文集」所収)、山口益博士(第一章—第十一章、「中論釈」I、II)、金倉円照博士(第十九章、福井博士
頌寿記念「東洋思想論集」所収)、長尾雅人博士(第十五章、「世界の名著、大乘佛典」所収)の訳がある。

なお、右の欧訳の出版については、三枝充恵氏の詳しい紹介がある(理想一九六五、九)。

(g) 順中論

無着 (Asaṅga) の作。中論の思想によって般若經の思想を明らかにしようとした作品であって、厳密にいえば「中論」の註釈書といえないが、「中論」の八不の偈など、「中論偈」を部分的に引用解釈している。漢訳のみに存する。

(2) 「六十頌如理論」(Yukti-sastika)

本書は、「中論」のような理論哲学書というより、むしろ、佛教にたいする龍樹の理解を率直に述べようとしたものようである。本書の梵語原典は発見されていないが、チベット訳と漢訳とがあり、月称の註釈のチベット訳がある。研究としては、Phil. Schaeffer氏の漢訳よりの独訳があり、山口益博士の註釈的研究

(中観佛教論攷三二頁——一〇九頁)がある。

(3) 「七十空性論」(Sunyata-Saptati)

「中論」の思想を部分的に展開したものである。梵語原典と漢訳とが存しないが、チベット訳が存し、また、龍樹の自註および、月称とパラヒタ (Parahita) 論師との註釈がチベット訳に存する。研究としては、山口益博士の「龍樹論師の七十空性偈」(佛教研究、第五卷、一・三・四、第六卷)がある。

(4) 「廻諍論」(Vigrahavyavartani)

「中論」の思想を部分的に展開したものであるが、説一切有部、あるいは、ニヤーヤ学派にたいする対論の形式で構成された論書であって、中観思想の理論的立場をうかがわしめる、よくまとまった作品である。

本書には、梵語原典もチベット訳も漢訳も存する。梵語原典は *Mélanges chinois et bouddhiques, 1951* に掲載された、ジョンストンとクンストンによって校訂されたものが新しい。「密教文化」(第七——十、第十二)に掲載された山口益博士の研究は完結していないが、昭和十九年の真宗大谷派の安居において、博士は全文の邦訳をプリントで公表している。また、最近、「世界の名著」(大乘佛典)の中に、梶山雄一氏が邦

訳を発表した。

(5) 「広破論」(Vaidalya-prakarana)

特にニヤーヤ学派にたいして書かれた論駁書である。チベット訳のみ存する。研究としては、山口益博士の「正理学派にたいする龍樹の論書」(中観佛教論攷一一頁——一六五頁)がある。

(6) 「宝行王正論」(Ratnavali)

国王や国民の実践すべき正法を説いた書であって、龍樹の著作としては、甚だ異色ある作品である。梵語原典とチベット訳と漢訳とが存するが、英訳を附して発表したトウッチ教授の校訂梵文(JRAS, 1934, 1936)は、完本でない。第一章にたいしてフラウワルナー教授の独訳があるが、最近、瓜生津隆真氏が、梵文を欠いた部分をチベット訳によって補い、全文の邦訳を発表した(世界古典文学全集「佛典」I、三四九——三七二頁)。なお、本書には、アジタミトラ (Ajitamitra) の註釈があり、チベット訳に伝えられている。研究としては、和田秀夫「宝鬘論 (Ratnavali) の内容概観」(大谷学報、二三、五)、「佛教の政道論」(日本佛教学会年報、第十八号)、中村元「佛教徒の政治思想」(大乘佛教の成立史的研究、三八一——四四六)がある。

(7) 「因縁心論頌」(Pratītyasamutpāda-hrīdaya)

漢訳とチベット訳とが存する。十二縁起にかんする小論であるが、ウランガ(Ulānga)の註釈の漢訳が存する。プーサン教授の佛訳(Theorie des douze cause, Appendix IV)があり、ウランガの註訳はゴーカーレー教授によって独訳されている。

(8) 「四讚」(Catustava)

無譬、超世間、心金剛、勝義の四を含んだ格調の高い宗教的な詩であって、月称のプーサンナバデーなどにはしばしば引用されている。チベット訳によるプーサン教授の佛訳(Museon 1913)があるが、トウッチ教授は、勝義讚と無譬讚の梵文を発見し、チベット訳と英訳とを附して発表した(JRAS 1932)。また、超世間、無譬、不可思議、勝義を四讚とする伝承もあり、トウッチ教授は、この四讚にたいするアムリターカラ(Amritakara)の要義(Samasārtha)の梵文を発見し公表した(Minor Buddhist Text. Part 1, 1956 Serie Oriental Roma IX)。さらに、酒井真典博士は、これにもとづいて、四讚の本文と要義とを邦訳した(日本佛教学会年報第二十四号)。

(9) 「菩提資糧論」(Bodhisambhāra-sāstra)

菩薩の菩提をうるための資糧を説き、「十住毘婆沙論」と関係の深い書である。全体が偈頌より成るが、自在比丘の註釈が存する。しかし、本書の偈頌・註釈のいずれにも梵語原典とチベット訳とが存しない。本書はあまり研究されていないが、「国訳一切経」論集部五に大野法道氏の国訳がある。

(10) 「十住毘婆沙論」(Dasabhumika-yibhāsa-sāstra)

華嚴經十地品の解釈論であるが、ことに、その「易行品」は浄土教に大きな影響を与えた。漢訳にのみ存する。原典批判的な研究として、平川彰「十住毘婆沙論の著者について」(印佛研5, 2)、長谷岡一也「龍樹の浄土教思想」などがある。

(11) 「大智度論」(Mahāprajñāpāramitā-sāstra)

「大品般若経」の註釈書。原始經典を引用して解釈する特色ある大部の作品である。漢訳のみに存する。支那、日本の佛教に与えた影響は大きいが、龍樹の真撰たることが疑われている。干潟龍祥「智度論の作者について」(印佛研7, 1)。なお、本書には第十八卷までのラモート教授の佛訳がある。

(12) 「十二門論」(Dvādaśamukha-sāstra)

「中論」の綱要書として、支那、日本の佛教に重ん

ぜられたが、龍樹の真撰たることは、疑わしい。安井広済「十二門論は果たして龍樹の著作か」(「中觀思想の研究」三七四—三八三頁)。

(13) 「大乘二十頌論」(Mahayana vimśika)

小論であるが、唯心論的思想をもった作品として注意される。梵語原典、チベット訳、漢訳、いずれも存する。梵語原典はトゥッチ教授によって英訳を附して発表されたが (Minor Buddhist Texts. Part 1)、龍樹の真撰たることが疑われる。

さて、龍樹には多くの弟子があったと考えられるが、彼の後継者となって後世に名をとどめた主たる弟子は、聖提婆 (Ārya-Devā) である。聖提婆には、次のような著作がある。

(1) 「四百論」(Catuhśataka)

本書は、聖提婆の名著であり、十六章にわかれ、前半八章は中觀學派の精神的訓練についてやされ、後半八章はサーンキヤやヴァイシシェーシカの如き非佛教徒にたいする反駁についてやされている。梵語原典としては、月称の註釈のついた断片がハラプラサード・シャストリ教授によって発見され出版されている (Memories

of the Asiatic Society of Bengal, vol. III, Calcutta, 1931)。しかし、月称の註釈がチベット訳に完本として伝わっているので、これによって、ヴァーイドヤ教授やブハッタチャルヤ教授などが照合研究し、部分的な梵語訳をおこなった。本書の註釈書としては、月称の註釈のほかに護法 (Dharmapāla) の「広百論釈論」があるが、これは本書の後半にたいする註釈であり、しかも、漢訳に存するのみである。研究としては、山口博士の「聖提婆造四百論に於ける説法百義の要項」(「中觀佛敎論攷」所収) がある。これは、月称の註

釈によって四百論前半の要義をまとめたものである。また、最近、山口博士は鈴木學術財団の研究年報(一九六四)に「月称造四百論註釈破常品の解説」を發表した。

(2) 「百論」(Śata-śāstra)

四百論の後半の内容に似た作品で、四百論にたいする入門書と見られる。漢訳にのみ存する。トゥッチ教授の英訳 (Pre-Dinnaga Buddhist Logic, Satasastra, Gaekwart Oriental Series XLIX) がある。なお、四百論、広百論、百論については、宇井伯寿博士「印度哲学研究」第一を参照。

(3) 「百字論」(Aksara-sataka)

サーンキヤやヴァイシェーシカにたいする論破を主とした小論である。チベット訳と漢訳とが存する。研究として、山口益博士「漢藏対照百字論及び訳註」(大谷学報、第十一巻、二)がある。

(4) 「心障清浄論」(Cittavisuddhiprakarana)

聖提婆の作品であるか否か、疑問視されている。山田龍城博士によって、梵語原典がチベット訳と対照して校訂され邦訳されている(文化、第三号、第四号、第八号)。

(5) 「智心髓集」(Jñānasārasamuccaya)

真撰か否か疑問視されている。研究として、山口益博士「聖提婆に帰せられた中観論書」(中観佛教論攷、所収)がある。

聖提婆以後の二百年ほどの中観学派の歴史は全く明らかでないが、婆藪(Vasu)が「百論」を註釈し、青目(Piṅgala)が「中論」を註釈した。この二書は漢訳に存し、青目釈の漢訳「中論」が支那・日本の中観佛教の典範となったことは、先に述べたとおりである。また、この時代にラーフラバドラ(Rahulabhadra)があり、中論に註釈をつくった、といわれている。しかし、これらと、

次に述べる佛護以後の中観学派との継承関係は、明らかでない。

中観学派は佛護 (Buddhapālita 470-540) と清弁

(Bhāvavivēka 490-570) の時代(3世紀)より、学説を組織化し、学派としての新しい発展を始めたようである。しかし、佛護と清弁は学風を異にし、佛護の系統はプラーサンギカ (Prasangika) といわれ、清弁の系統はスヴァータントリカ (Svāntarika) といわれる。この二流派の相異については、野沢静証博士「中観両学派の対立とその真理観」(「佛教の根本真理」所収)に詳細である。現在、佛護の著作としては、先に「中論」の所で紹介した「中論註」の一書がチベット訳に伝わるのみである。

しかし、清弁の著作には、次の如きものがある。

(1) 「中観心論」(Madhyamaka-hṛdaya-kaṅkikā & vṛitti, Tarkajyāla)

清弁の主著となる体系的著作である。全体が十一章より成り、この中で、清弁はそれぞれ一章をついやして、サーンキヤ、ヴァイシェーシカ、ミーマーンサ、ヴェーダーンタの学説を批判し、すこぶる重要視される。本書には漢訳はない。梵語原典は断片として存す

るのみである。しかし、完本としてチベット訳があるので、これによって、第三章が野沢静証博士（密教文化第二十八号—第三十一号、第三十四号、第四十三、四十四号）、第五章が山口益博士（佛教における無と有との対論）、第七章が宮坂宥勝博士（高野山大学論叢第一号）、第八章が中村元博士（初期のヴェーダーンタ哲学）によって、それぞれ、邦訳、あるいは、研究されている。また、このほかに研究もあるが、これらについては、水野弘元博士還暦記念「新・佛典解題事典」（二五二頁、春秋社）に詳細である。

(2) 「異部分別釈」(Nikāya-dheda-vibhāṅga-vyākhyāna)

小乗諸部派の学説を集めたものである。しかし、この書の本文は「中観心論」の第四章「声聞真実決択章」に見いだされる。

(3) 「般若灯論釈」(Prajñāpradīpa-mūla-madhyama-kāvittī)

本書については、先に「中論」の註の所で、すでに紹介した。

(4) 「掌珍論」(Karatāntra)

清弁の中観学説をまとめたものと見られる。漢訳に

のみ存し、これにたいして、ブーサン教授の佛訳(Mélanges chinois et bouddhique II)がある。

(5) 「中観義集」(Madhyamaka-ārtha-saṅgraha)

(6) 「中観縁起論」(Madhyamaka-pratītyasamutpāda)

(7) 「中観宝灯論」(Madhyamaka-ratna-pradīpa)

右の三書は、清弁の著作であるか否か疑問である。

むしろ、これらは、後期中観学派の作品として注意すべきものようである。いずれも、チベット訳にのみ存する。「中観義集」と「中観縁起論」とは、きわめて短い小論である。「中観宝灯論」にたいしては、山口益博士の研究があり、「中観派における中観説の綱要書」大谷大学研究年報、第二輯）、また、荷葉堅正氏の研究がある（本誌、第四号）。

清弁の時代より、わずかにおくられてあらわれたのが、月称(Candrakīrti 600-650)である。彼は、佛護のプラーサンギカの学風を宣揚し、先に紹介したように、龍樹・聖提婆の著作に註釈をあらわし、中観学派の体系にオーソドックスの形態を与えた。彼には、次のような著作がある。

(1) 「入中論」(Madhyamakavatara)

月称の名著となる代表的著作。全体が十二章より成るが、ことに第六章に多くの紙数がついやされ、ここで、月称は、サーンキヤ、ヴァイシェーシカ、ヴェーダーンタ、ローカーヤタなどの外教のみならず、唯識学説を評難し、中観学派の二諦説・無我説などの重要教義を述べている。チベット訳のみが存し、これが、ブーサン教授によって校訂出版 (Bibliotheca Buddhica IX.) され、部分的に佛訳されている (Muséon, 1907, 1910, 1911)。また、笠松単伝氏は、第一章を (佛教学研究四—三および、「印度哲学と佛教の諸問題」所収)、北畠利親氏は、第二章を (佛教学研究、十八、十九)、第四章、第五章を (竜谷大学論集、三七四)、それぞれ邦訳した。このほか、「入中論」の研究として、瓜生津隆真氏「中観佛教におけるボサツ道の展開」(鈴木学術財団研究年報一九六四) などがある。

(2) 「中論註」(Prasannapada nama Madhyamakavritti)

本書については、すでに「中論」の註の所で紹介した。

(3) 「六十頌如理論註」(Yuktisastika-vritti)

(4) 「七十空性論註」(Sunyatapatti-vritti)

(5) 「四百論釈」(Catuhśataka-tika)

右の三書については、龍樹、および聖提婆の所で、それぞれ一言した。

(6) 「五蘊論釈」(Pancaskandhaprakarana)

世親の「五蘊論」を前提として註釈したものと思われるが、法相分別について、瑜伽唯識学派の説明となり相異なる注意すべき著作である。チベット訳にのみ存する。

(7) 「入中観智恵」(Madhyamakaprajñāvatara)

(8) 「三帰依七十論」(Trisraṇa-Saptati)

右の二書は、チベット訳にのみ存し、きわめて短い小論である。

月称の次の時代にでた中観学派の著名な学者に寂天 (Santideva 650-750) がある。寂天は月称のブーサンギカ派にぞくする学者で、チベットの佛教史家であるブトンによると、彼には、次の三部の著作があった、とされる。

(1) 「入菩提行論」(Bodhicaryāvatara)

寂天の名著で、全体が九一七の偈頌より成り、十章

にわかれる。菩薩の実践的な悟りへの道を説く書であるが、その第九章において、中観学派の二諦説を述べ、小乗佛教や外教を論破して、さらに唯識説に評難を加えており、きわめて価値のある作品である。梵語原典、チベット訳、漢訳のいずれにも存するが、漢訳は原典の第三、第四章を欠く。ブラジュニヤーカーマティ(Prajakaramati)の梵文の註釈書が存し、また、この他、チベット訳に八種類の註釈書がある。梵語原典の出版や欧訳については、金倉円照博士「悟りへの道」(サーラ叢書9、本論偶頌の邦訳)に詳しい。なお、河口恵海師によって「入菩薩行」として、かつて、邦訳されたことがある。

- (2) 「大乘集菩薩学論」(Śikṣā-Samuccaya)
- (3) 「大乘宝要義論」(Sūtra-Samuccaya)

右の二書は、多くの經典の教説を引用集成したものであり、中観思想の思想的背景や実践的立場を知るうえで貴重な資料である。「大乘集菩薩学論」には、梵語原典とチベット訳と漢訳とが存し、梵語原典はベンダール教授によって Bibliotheca Buddhica I (1897-1902) に校訂出版されている。また、本書には英訳(W. H. D. Rouse <Śikṣāsamuccaya> Indian Text

Series, Calcutta, 1922)がある。しかし、大乘宝要義論には梵語原典が存しない。また、この書については、寂天の著者たることに疑義がもたれている。

インドの中観学派ということになれば、寂護(Śāntaraksita 700-760)、蓮華戒(Kamalaśīla 730-800)に当たるまで紹介すべきかと思うが、いまは、寂天までにとどめておく。インドの中観佛教を学ぼうとするものは、以上の紹介によって、ともかく、中観佛教の研究が、どのような領域の研究であり、どのように進められているかの大体を心得る必要がある。

三

中観佛教を学ぼうとするものは、ここまできたら、右に紹介した文献を用い、文献研究を参考にして、実地に自分で勉強してみることである。虎穴に入らずんば虎児を得ず、である。このためには、梵語とチベット語とに習熟しなければならぬ。中観佛教のみならず、大乘佛教の文献は、すべて梵語かチベット語で書かれており、ことに梵語の文献は多く失われ、チベット訳が藏経として伝えられるから、チベット語の学習は非常に大切である。中観佛教の研究は、これら二つの言語を学んで、自分で

原典に直接あたってみるより外はない。これが最善の方法である。

このさい、梵語とチベット語と漢訳語の索引である「翻訳名義大集」を使用することも必要である。この索引は語句の佛教的な意味を知るうえに便利である。むろん、この索引によって、梵語やチベット語を佛教の漢訳語におきかえるだけではいけない。文字そのものの意味を、辞書によって正確に知らねばならないことは、いうまでもない。芳村修基編「チベット語字典」(プリント草稿本)は、「翻訳名義大集」より語彙を多く集めているのが便利であるが、現在入手困難のようである。最近、鈴木學術財団より刊行された平野隆氏が編輯した「入菩提行論」第九章の梵語、チベット語の索引は、中観研究に欠かせない貴重な索引である。この他、同財団刊行の梵語、チベット語の索引に、長尾雅人博士の「大乘莊嚴經論」の索引、中村瑞隆博士の「宝性論」の索引(究竟一乘宝性論)所収)、コンゼ博士の「般若經」の索引があるが、これらは、いずれも研究者の座右にすべき貴重な索引である。また、鈴木大拙博士の「入楞伽經」の索引も有益である。研究にこころざすものは梵語とチベット語とを学び、辞書やこれらの索引を使用して、ともかく、

原典に直接あたってみることである。

勿論、原典に実地にあたってみると、なかなか困難である。たとえ、翻訳を参照しても、初心の者に、原典はたやすく読めるものでなく、また、たやすく理解しうるものでない。そこで、初心の者は、どうしても、翻訳を中心とし、先輩の種々の研究を読んで、研究をすすめることになる。これも、やむをえぬことであろう。しかし、少しでも、原典に接しようとする心構えが必要である。

中観思想をとりあつかう種々の研究を、いまここに、あげる余裕はない。「印度学佛教学研究」、「日本佛学会年報」、「各大学の研究雑誌」などに、中観関係の論文がしばしば掲載されており、また、単行本に収められる論文も多いから、中観佛教を学ぼうとする者が、これらの研究論文に注意すべきことは、いうまでもない。

研究書としては、まず第一に、山口益博士の文献学的研究に注目すべきであろう。山口博士の「佛教における無と有との対論」(山喜房)は、中観学派と唯識学派との論争の研究であり、佛教における中観思想の教義や立場を始めて客観的に究明した非常に価値のある力作である。博士の「中観佛教論攷」(山喜房)は、中観諸論書の文献学的研究であるが、初学者にも甚だ有益であり、「中論

「釈」(清水弘文堂)は、斯学の徒のひとしく完成をねがう偉業である。また、宮本正尊博士の「中道思想及びその発達」(法蔵館)、「根本中と空」(第一書房)などに見られる中観研究には、多くの傾聴すべき論文が含まれており、裨益する所が多い。最近刊行された、宮本、梶芳、泰本訳「中観論疏上」(国訳一切経、和漢撰述部二六)は、中国の佛教の書であるが、インドと中国の中観佛教の比較研究もすすめるべきであり、研究者の座右に備えるべき書であろう。

また、長尾雅人博士の「西藏佛教研究」(岩波書店)は、ジョンカパというチベットの学僧の書いた「ラムリム」という中観論書の翻訳であるが、「ラムリム」は全くインド中観論書の姿を伝えており、かつ、長尾博士の邦訳は推敲を重ねた名訳であり、読者をして難渋せしめない。本書は、中観佛教の全貌をうかがわしめる、すぐれた概説書であって、初心者には、特にこの書を推したい。また、すこし方面がかわるが、中村元博士の「宗教の社会倫理」(岩波書店)を始めとする佛教倫理にかんする著作も、研究者にとって必読の書であろう。中観の研究者は、とかく、難解な教義の解釈におちいりやすい。しかし、中観の教義が、いかに社会倫理に結びつくかの問題は、

まことに重大である。あるいは、平川彰博士の「八千頌よりなる般若波羅蜜経」(筑摩書房、世界古典文学全集「佛典Ⅱ」所収)も注意すべきであろう。般若経は中観思想の源泉であり、発展の母胎であるからである。

また、稲津紀三「龍樹空観の研究」(大東出版社)、上田義文「大乘佛教思想の根本構造」(百華苑)、田中順照「空と識」(永田文昌堂)、増田英男「佛教思想の求道的研究」(創文社)なども注意すべきであろう。それから、はなはだ恐縮であるが、私の書いた「中観思想の研究」(法蔵館)にも注意していただきたい。学者によって、見方も異っているが、それぞれの特徴をもっており、これらの書物によって、研究者はいろいろと批判の眼をやしない、学問をすすめていくのがよい。なお、欧文のものであるが、マルチイ(T. R. V. Murti)博士の「The Central Philosophy of Buddhism」(London, George Allen and Unwin, 1955)は、中観思想の哲学的な研究であり、啓発されるところが多い。中観にかんする欧文の専門書としてまとまったものは、現在、本書ぐらいでないかと思う。難解と思われる箇所もあるが、なかなか意欲的な著述である。

なお、鈴木大拙博士のものも読むとよい。博士の著作

には、般若中觀思想の風格があらわれている。また、空
の思想を問題とした西谷啓治博士の「宗教とは何か」
(創文社)の如き哲学書、あるいは、唐木順三氏の「無

常」(筑摩書房)の如き、佛教思想をとりあつかった評論
や随筆を読むのも必要であろう。

— 完 —